第469号 昭和59年 7 月 20 日発行（毎月 20 日発行）
昭 和 49 年 8 月 31 日 第三種郵便物認可

1984年（昭和59年）
7月号（No. 469）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

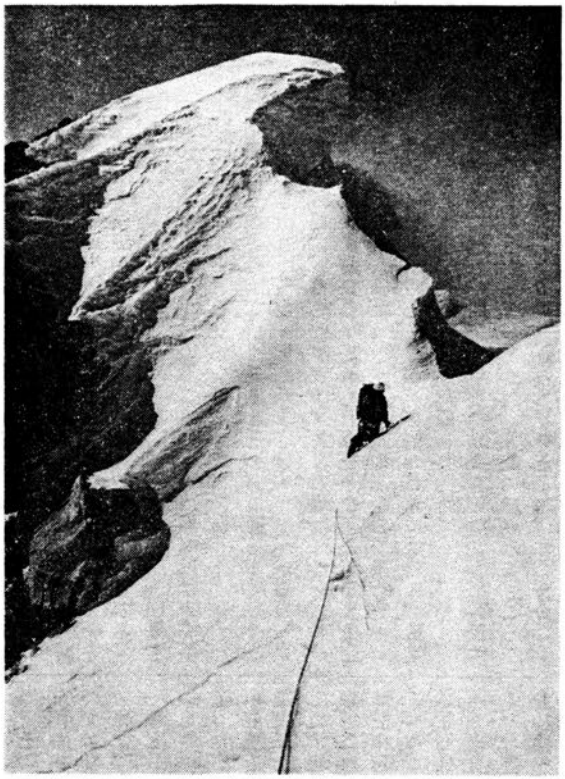
目　次

カンチェンジュンガ登山隊報告
鹿野勝彦 ……（1）
（昭和59年度総会）
佐々会長挨拶 ……（1）
海外の山 ……（3）
「グランド・トラバース」「ディ・ベルクヴェルトの記事」
加藤泰安をしのぶ会 ……（3）
パークス夫妻の富士登山（上）
山崎安治 ……（5）
第21回『この一本展』より（3）……（6）
図書紹介 ……（6）
「東京から見える山 276」「大岩壁の50年」「大登山家の歴像」「追悼前田浩」「未踏への挑戦」
東西南北・会員通信 ……（8）（15）
会務報告・ルーム日誌 ……（10）
お知らせ ……（2）（11）
八十周年記念事業募金応募者芳名 ……（12）
図書受入報告 ……（13）
新入会員等会員移動 ……（14）

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時
▶ルーム夏休み　8月13日～18日

カンチェンジュンガ登山隊報告

鹿野勝彦



カンチェンジュンガ中央峰付近/撮影・重広恒夫

「十二時十五分、主峰の頂上につきました」三谷の声が、トランシーバーにとびこんできた。その日、五月二十日、私は朝からCIの上、ハンプ稜上の、通称「見晴し台」の上から、双眼鏡でずっと和田と三谷の姿を追い続けていた。いつもは十一時すぎから雲でおおいかくされてしまうカンチェンジュンガの主稜線も、この日ばかりは、正午をすぎてもまだ全容を見せていた。青い二つの点が、ここからほぼ最高点と見えるあたりに達し、視界から消えて五分ほどして、いくらかかすれた、しかししっかりとした声で、登頂の第一報が入ってき

（昭和五十九年度総会）

佐々会長挨拶

本日ここに昭和五十九年度の本会の総会を開くに当りまして、会長として、ひとことご挨拶を申し上げます。

総会は、年次晩餐会とともに、会の最も大きな催しですが、多数の会員のご出席と委任状により、ここにその成立を見ましたことを、まことに喜ばしく存じております。

まず順序として、会の現状について申し上げます。詳しくは後の担当理事の報告に譲りますが、会員の現在総数は三九四四名です。これは物故会員二五名、退会者三一名、除籍対象者七〇名と再入会員八名、新入会員一七三名、差し引き一〇五名増で、例年並のふえ方と申せましょう。ただ、昨年の年次晩餐会の折にも問題として呈示しましたように、若い会員の数が甚だ少ない。二十九才以下の会員は僅かに三%に過ぎません。これは会の将来のためには、まことに心細い限りと申すべきでありましょう。これにどう対処するか、再び会員諸氏のご一考を煩わしたいところであります。

この一年を顧みますと、会報「山」と年誌「山岳」をお届け申し上げましたが、前者は編集者の都合で、一とき遅滞と減頁を見ましたこと、まことに恐縮に存じ、深くお詫び申し上げます。「山」は会員と会とを結ぶきづなでございますが、先刻催されました支部長会議ではその内容を一層充実し愉しく読めるものをとのお声がありました。また「山岳」に関しては記事が偏しているとのご指摘も受けました。会当局ももちろん心致しますが、会の皆様もこれについて、積極的なご協力をお願い申し上げます。

各委員会の活動振りも「山」でご承知のことと存じますが、甚だ活発なものから、停滞ぎみのものまであります。委員会が委員たちのためでなく、会全体の中での一機能を担っているとの意識に立ち、その使命を果されることを期待する次第です。

一方、支部は現在一九あり、会員は総数の六割を占めております。それぞれ設立の経緯も違い、新旧、大小あり、各々自主的に活動しておら

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

お知らせ電話 234六六五九

たのだ。「おめでとう」三日前、磯野らが中央峰に立ったときも、二日前、重広、和田、三谷らが南峰、中央峰と続けて頂上を踏んだときも、また、昨日、尾崎らが主峰に登ったときにも言わなかったこの言葉が、その日は自然に私の口から出た。それは、三つのピークを踏破した和田と三谷への、そして彼らとともに登ってきた私たち全部への祝福であり、同時に、残された西峰への試みを放棄することを、半ば意味していた。もう私たちの力ではこれ以上は無理だ、その判断はCⅠにいる私にも、主峰を登りながら何度もふり返って西峰へのルートを確認しようとしていた和田、三谷にも共通していた。その日の夕方、私は正式に撤収を指示した。残念ではあったが、悔いはなかった。カンチェンジュンガは大きな山だ、しみじみとそう思った。その大きな山で、力一杯の登山を展開し、皆が無事に下ることができたとしたら、結果はどうであれ、満足しなければならないだろう。

隊の結果を要約すれば、カンチェンジュンガ四峰の完全縦走を目標としたのに対し、南峰→中央峰の縦走には成功したが、主峰へは、稜線をたどることができず、中央峰ルートのCⅣ、CⅤ、主峰ルートのCⅣ、CⅤを経由して（すなわち西面の山腹を巻いて）登頂することになった。三峰に登頂したのは二名、南峰、中央峰の二峰に登頂したのは一名で、他にサポート隊として南峰に一名、中央峰に三名、主峰に二名が登っているから、登頂者数は九名（うちネパール人三名）、登頂はのべ十四回ということになる。西峰へは全く手をつけないままであった。

縦走とともに目標としていた、標高八〇〇〇メートルからのハンググライダーの飛行については、これも目標をやや下まわる七八〇〇メートル地点からの飛行となったが、只野が無事に成功し、高度の新記録を作った。

以上の結果をどのように評価するかは、意見の分かれるところであろう。隊としては、まだ充分に意見をまとめ私たちなりの結論を出すに至っていない。私個人としては、ともかく隊員、ハイポーターの登山期間中の事故が無かったことを前提とした上で、南峰→中央峰間のみとはいえ、八五〇〇メートル前後の二つのピークの縦走を行ない、和田、三谷が八〇〇〇メートル以上のキャンプに連続四泊し、良好な体調を維持して下山したことにより、今後の超高所での縦走にある程度の展望を切り拓いた。その意味からすれば、不完全ながらある程度の成果はあげ得たのではないかと思っている。

また、会の八十周年記念事業の一環としては、以上のような隊そのものの結果への直接的評価とは違った、やや別の視点からの評価も必要となろう。今回の隊には、従来以上に多くの若い会員が参加した。決して実績があるとはいえないこれらの若い隊員が、長期間の登山を通して、着実に力と自信をつけてゆく過程は、まことに目ざましいものであった。彼らが今回の経験の上にたって、今後どのような登山を展開してゆくのか、長い眼で見ることにより、このプロジェクトに対する評価は決まってくるのかもしれない。

カンチェンジュンガ計画が実現するまでの道は、決して平担ではなかった。会の内部においても、必ずしも当初から全面的な支持が得られたわけではなかった。そのような状況の中で、あえて本計画の実行に携わり、物心両面から支援を惜しまれなかった会員各位に心から御礼申し上げたい。

—お知らせ—

カンチェンジュンガ登山隊報告会

日時　七月三十日（月）午後六時三十分より

場所　自治労会館（千代田区六番町。☎03-二六三-三七三九）

なお、報告にはスライドが併用されます。

れます。中にはよき指導者や協力体制によって、見るべき活動をしておられる所もあり、十年一日の如き凡々たる支部もあります。若年会員の確保、会の盛衰は、人を惹きつける山行と、楽しい集会にあることに思いを致され、それぞれ新たな発想の下に、次の一年に向われることを願う次第です。

一方、本会の経済状態につきましては、のち程、担当理事に説明致させますが、会費の納入率は九割近く、それに基づいて、例年通りの事業を致しまして、多少の繰越金を生ずる程度、先ず健全財政と申せましょう。しかし新たに何かしようとすると、その余裕のないのが残念です。そこで会費の値上げの問題が生れて来ます。本会の会費はこの七年ほどすえ置きで、例えば月報の内容を豊かにするための増頁も今のままでは出来ません。今回はこの問題を討議するほど、理事会でも煮つまっておりませんが、東京と地方の会費の差の問題とともに、いずれ会員の皆さんに充分、論を尽して頂きたいと存じております。

本会は既にご了承のように明年で八十周年を迎えます。これに関する諸行事につきましては、山田副会長の下にいくつかの委員会も設けられ、着々準備中で、後刻これにつきお話があることになっております。今回の特徴の一つは、今までこうした催しは東京のみで行われて参りましたが、今回は地方の支部またはその合同で、各地で開催されることであります。それぞれ適切な期日に、記念集会、例えば記念講演会や晩餐会、あるいは展覧会や記念山行が行われます。会が一体感を意識して行動するよい機会となることと信じております。

また、この八十周年という節目をスプリングボードとして、三つの柱を打ち立て、将来の会の存在を確たるものにしたいとも考えております。その一つは、来るべき百年を迎えるため、今のうちに会の歴史をとりまとめて置くことであります。幸いに会の長老の望月会員が進んでその作業をお引受け下さる由で、まことに人を得たと喜んでおる次第でございます。

次は「山岳博物館」の件です。この八十周年の記念行事の中に、展覧会の催しがありますので、その展示品を中核にして、将来然るべき土地に博物館を設け、山と人と登山の関わりを示す広範な展示、いや単なる博物館的な陳列でなく、観る人の参加型、実験型のものをと指向しております。これにつきましては目下会員の有志が寄りより勉強会を致しているところでございます。

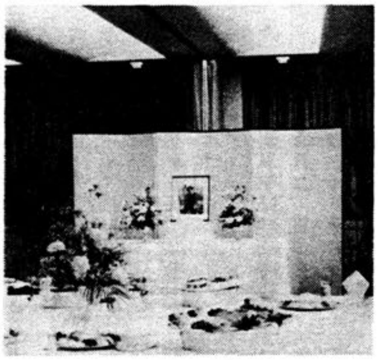
他の一つ、これはかねて皆様にお願い申し上げております「山岳特別基金」のことであります。その趣旨はお願いの中に書いてある通りでございますが、将来の会の大きな行事とか海外交流のためには、現在の会費だけでは何も出来ません。それらに備えての基金であります。この旨ご諒承の上、ふるって御恵与頂ければ幸甚に存じます。

以上、会の現況と将来の発展のため、二、三の所見を申し述べましたが、会員諸氏におかれましては、山岳会は自分たちのものとの意識の下に、あらゆる機会に会の行事に参加され、よい会として盛り上げて頂きたいと希望致す次第でございます。ご静聴どうも有難う存じました。

加藤泰安をしのぶ会

本年四月二十四日、名誉会員加藤泰安氏の一周忌を迎え、〝ひろ子未亡人も永い入院生活からやっと退院され、お元気になられたので、これを機に山と酒が好きだった私たちの大切な友人、泰安をしのぶ会を開くことにしたので是非ご出席下さい〟との案内状が、発起人、田口二郎、竹内佐郎、舟橋明賢の名で発せられ、四月十九日（木）午後六時〜八時、三井霞ヶ関ビル三十四階の霞会館において開催された。

出席者は本会関係者五十三名の他、学習院山桜会関係の方、AACKの方と、山関係の三つのグループから合計一〇七名を数え、加藤ひろ子未亡人も久しぶりにお元気な姿を見せた。



撮影・贄田統亜会員

会は、発起人の一人であり、前記三つのグループに関係されている友人ということで、舟橋明賢氏が司会者となってはじめられた。先ず発起人を代表して田口二郎氏から、本日の会を開催するに到った経緯について説明があり、看病疲れで長いこと入院されていた奥様をお慰めする意味で自分は仕掛人となった旨の挨拶があった。次いで長老の三田幸夫氏は、マナスルの帰途カルカッタにおいて泰安氏と一緒に禁足をくったときの想い出を語り、三田氏の音頭で、お酒の好きだった故人をしのんで献盃が行なわれた。

今西寿雄氏は、昭三組のAACKの長老が、京都で別の会合があって来られないので、AACKを代表して想い出を語られたが、白頭山にはじまり、大興安嶺—蒙古—ヒマラヤ—カラコルムとつづくAACKの全計画にはじめから終りまで参加された泰安氏は、幸福な人であったと、今西錦司先輩の言葉を借りて、泰安氏をしのぶ話を結ばれた。

次に学習院山桜会を代表して、山桜会長の鍋倉英

海外の山

グランド・トラバース

JACのカンチェンジュンガ縦走は一応成功を収めた。ヒマラヤ登山のバリエーションは、未踏ルートの探査、初登攀が新味をともなう魅力となって十数年を経過したが、もう一つの登法に「縦走（トラバース）」があるといえる。西稜—頂上—南東稜と結んだ米エベレスト隊（一九六三年）を嚆矢として、JACのナンダ・デビィ縦走（一九七六年）、カモシカ同人隊のダウラギリⅡ、Ⅲ、Ⅴ峰の縦走と、日本隊は、爆発的な体力では外国勢に劣るが、組織力と耐久性をいかして縦走計画の効率を高めてきた。

さらに、一九八六年は、日本隊がエベレスト西稜から頂上—南東稜—ロトツェ—ヌプツェを結ぶ、約三十二㌔の縦走〝グランド・トラバース〟の登山許可を得た（詳細不明）、と「エベレスト」の著者、ウォルト・アンスワースが近着の「クライミング」誌に発表している。

この構想は同氏がすでに「エベレスト」の後記で触れたもの、としているが、同氏の著書を待つまでもなく、ウエスト・クム氷河に立てば、誰もが抱く〝ロマン〟である。メスナーも、同じ記事のなかで、この計画について質問され「十数年は実現性がない」ものとしていた。またスコットは「金力にものをいわせれば……」と皮肉った見方をこの日本隊の計画にぶっつけている。

エベレスト南西壁の計画も、ディーレンファース、ロバーツの合作として発表したが、現実には一九六九年のJACエベレスト隊が最初に偵察し、結局、初登攀は一九七五年のボニントン隊まで待たなければならず、その間、五隊が試みている。今回のグランド・トラバースも、単発的には個々のピークの登山があるが、問題はローツェ—ヌプツェ間の未踏部分である。どのような作戦展開となるにしろ、長期間にわたる超高度の作業は、登攀者の体力の維持が大きなテーマである。

メスナーの後継者ともいわれるピエール・ベギン（仏）が昨年のポストにカンチェンジュンが南西壁（英—一九五五年ルート）ルートの、初の単独登頂に成功している。八千メートル峰単独登頂者として、ナンガ・パルバートとエベレストで果したメスナー、ダウラギリ主峰の禿（かむろ）、マカルー主峰のククカスカにつぐもので、ピークとしては五つ目。そして今春はメスナーが、彼自身の八千メートル・ピーク十一座目としてダウラギリ主峰に挑んだが、その結果はどうなったか注目される。

いま年間、数百隊がヒマラヤに挑み、山、人の個々の記録の集計が煩雑化してきたことを考え、英アルパイン・クラブは、ネパール、パキスタン、インドの山域に限って、その記録をコンピューター化する計画を進めている。委員長はカンチェンジュンガで有名なジョージ・バンド。一九八六年には作動を開始し、有料でその資料を提供するという。日本でもその計画を練っている人は多いが、実現までにまだ日は遠い。

（片山全平）

山をきれいに　ゴミは持ち帰ろう

夫氏の挨拶があり、マナスル以来の友人、村山雅美氏は、芸者ワルツの想い出を語った。中尾佐助氏は張家口の西北研究所時代の想い出を語り、学習院学長の木下是雄氏は、鹿島槍遭難以降の山桜会における泰安氏の世話役ぶりについて触れられた。

次いで、旧陸軍中野学校時代の同級生、桜一郎氏は、三つのどのグループにも属さない者の一人ということで、昭和十五年十二月に中野学校に入校し、八ヶ月の教育を受けた頃の想い出を語られた。数ある中野学校入校者の中で、教育なかばで退校していくのに、堂々と正門を出ていったのは、後にも先にも泰安氏以外にいなかったこと、その後、戦後もずっとつきあっていたことを話された。

渡辺兵力氏は、〝仏（ほとけ）の泰安〟の由来について触れ、チョゴリサの登頂者、岩坪五郎氏は日頃尊敬している泰安さんからは、誇りをもって山に登ることを教えられたと、ユーモラスに話された。

このようにして歓談のはずむなか、終りの時間が近づき、川喜田二郎氏の〝セーノ〟という掛声で、生前、泰安氏が愛唱されていた「蒙古放浪歌」が斉唱され、最後にひろ子未亡人から、御礼をかねた次のような挨拶があった。

「私どもが田島さんの仲人で昭和十八年に結婚して、ちょうど四十年でしたけれども、十年ずつの区切りがあったように思います。二十八年のマナスルから三十八年のニューギニア遠征までが、泰安が山男として一番充実していた時ではなかったかと思います。四十八年に蜘蛛膜下出血をしましてからは、殆んど入院、退院の繰り返しの十年でした。私も適当に気を抜いたりしておりましたけれども、やはりその疲れのためか、片方の脚が痛くなりまして、多発性筋炎という診断を受け七ヶ月入院生活を送ってまいりました。その間、皆様にはすっかりご無沙汰申上げましたことをお詫び申上げます。本日は本当に有難うございました」

こうして会は、定刻の八時をすぎて、発起人の最後の一人、竹内佐郎氏が立って、加藤泰安（やすお）氏とは京大山岳部時代、同期で、しかも同じ下宿にいた関係で発起人に名を連ねたとの説明があり泰安氏の本名について紹介があった。〝今日の会に彼奴来ていないのではないか〟と亡き泰安が言ったとすれば、それは発起人の手違いによるもので、深くお詫びしたいという言葉を最後に、この会は盛会裡に閉会した。

本会関係出席者（五十音順）

穴田雪江、飯野享、石坂昭二郎、今西寿雄、岩坪五郎、小方全弘、小倉董子、大塚博美、大森薫雄、岡本龍行、織田沢美知子、織内信彦、川喜田二郎、川崎巌、川森左智子、木下是雄、

会報五月号の〝「ディ・アルペン」編集長からの手紙〟の続篇で、同編集長から送られてきたドイツの山岳雑誌『ディ・ベルクヴェルト』の記事を次に掲載します。ティーフェングラーバーも架空名で〝深い穴掘り〟といった程度の意味です。（編集）

＊　＊　＊

フェアミーンズ・M・シュピッツェとの対話

カール・ティーフェングラーバー

T　「シュピッツェ〈SPITZE＝先端の意〉さん、貴方は珍しいお名前をお持ちですね」

S　「ええ、私は自分にとって珍しい、さまざまなことを求めています。しかしどれも記録を求めてするのではありません」

T　「ですが、貴方がおやりになった登山の記録は自慢できる線のものですよ。貴方は無酸素登山の王者ですし、徹底した単独行者です。どのように登山したかを貴方は非常にたくさんの本にお書きになっていますし、すべての登山者のなかで最も多く八千メートル峰に登っておいでです。テレビにも最も多く出ておいでだし、最多数の讃美者をお持ちです。貴方を羨ましがる者もいちばん多いのです。これからもまだ記録を更新するものが貴方にはおありでしょうか？」

S　「私はどれも記録を求めてやっているのではありません。私は自分を識ろうとしてやっているのです」

T　「貴方は自分の内面深くを窺おうとして高いところへ登るのだと、書いておいでした」

S　「…そうです。そして私は人工的補助手段を忌避しています。人間が自分の生れつきの才能を、独力で発揮できるかどうか調べるのは、理にかなったことだからです」

T　「大遠征隊を使わず、酸素を使わずに、単独で、モンスーンの中を、冬、八千メートル峰へ…。貴方のようなかたはこれから何をなさるのですか？」

S　「今、私は世界の八千メートル峰のすべてに登ろうと考えています。そして、できれば、既婚の婦人を八千メートル峰の先端に連れていきたい…」

T　「そうすれば、これは初めてのことで、完全な記録ということになりますね。そのうえシュピッツェさんの本が記録的な人気を呼ぶことでしょう。しかし、もう八千メートル峰には何人も婦人たちが登っていますが」

S　「私といっしょではありません。この記録が成立するのは、その婦人が私といっしょに八千メートル峰の先端まで行ってのことです。それでやっと世にも稀なこととなるのです。ベースキャンプまで行った婦人たち―私とですが―それについては発表しました。これに付随するさまざまな問題等についても。私と、ある婦人が八千メートル峰の頂上まで登れば、これが世間の大評判となるのは確かです」

T　「そのことで恐らく完全にこの道の大家となるでしょうし、それはさらにもう一つの可能性を高めていくことになるでしょう…」

S　「そこに遊びを要素とするものはないと私は信じています。それに、私がこれをするのは記録を求めるからでも、大評判を得るためからでもありません。自分を深く見つめるため、それと私の深奥に聞くため…」

T　「山が呼んでいるかどうか聞くため？」

S　「いいえ、これはトレンカーのいう擬人観のようなものではありません。そういったものと

小峰顕一、斉藤桂、佐藤テル、坂本矩洋、三辺夏雄、鴫原啓佑、島田巽、周布光兼、田口二郎、武田満子、高橋定昌、谷口現吉、中尾佐助、中島伊平、貴田統亜、芳賀孝郎、早川瑠理子、平井一正、広羽清、藤平正夫、舟橋明賢、細川沙多子、堀田弥一、堀内章雄、本多勝一、松田雄一、三田幸夫、宮下秀樹、村井米子、村山雅美、望月達夫、山口節子、山崎安治、山田二郎、芳野赳夫、倭島進、渡辺兵力

以上本会々員五十三名を含め計一〇七名出席

（松田雄一）

――登山史メモ②――

パークス夫妻の富士登山（上）

山崎安治

第二代駐日英国公使サー・ハリー・パークス夫妻の一八六七年（慶応三年）十月の富士登山については、東洋文庫『日本事物誌』第一巻（チェンバレン著、高梨健吉訳、昭和四十四年一月、平凡社刊）の「富士」の章で、パークス夫人はこの山頂に登った最初の女性であり、それは一八六七年十月のことであったと述べられている。

次いで同じく東洋文庫『ヤング・ジャパン』第二巻（ブラック著、ねず・まさし他訳・昭和四十五年七月、平凡社刊）の第十一章「パークス卿夫妻の富士登山」ではいま少し詳しく記されている。

「パークス卿は、夫人と大勢の友人と一緒に、今月初め富士登山をした。非常に遅い季節で、頂上はすでに雪に覆われていた。しかし一行はあらゆる困難を乗り越えて成功をおさめた。パークス夫人でさえ、最後まで頑張り、ついに日本の最高地の上に立った。彼女こそこの神聖な高地に到着した最初の外国女性であった。日本女性は、この山に登ることを禁じられていたから、恐らく女性では最初の登山者であった。寒気の厳しさは非常なもので、一行の中には、歩きながら手を振ると、手の皮のすりむけた者もあった。気温は華氏十度（摂氏零下十二・二度）の低さだった」

朝日新聞に連載された『サトウ日記抄・遠い崖』（萩原延寿）の昭和五十六年二月十二日付の第六七一回、「大政奉還・パークス夫人が初登頂」に、パークス公使の一八六七年十月十五日付の、ハモンド外務次官への半公信として送った登山の状況が次のように記されている。

「私は十一日ほど江戸を留守にし、田舎へ出かけてきたが、その間日本でもっとも高い山として知られる富士山に登った。海抜一万四千フィートである。一八六〇年（万延元年）にサー・ラザフォード・オールコックが登って以来、昨年アメリカ人とスイス人の一行が登るまで、外国人で登頂を試みるものはだれもいなかった。今年になって、私はオランダの外交代表（ファン・ポルスブロック）に先を越されたが、私の登頂はこれまでのそれと類を異にしている。それはパークス夫人が一行に加わり、登頂をなしとげたからである。すなわち、夫人は富士山に登った最初の外国の女性であり、登攀のきびしさを考えると、多分ここ当分の間、最後の外国の女性ということになろう」

さらにこの登山に同行した英国公使館付医師ウイリアム・ウイリスは、一八六七年十月二十九日付で長兄、ジョージの夫人ファニーにあて手紙を書いている。

「最近の大きなニュースは、雪と氷の中を海抜一万四千フィートの富士山の頂上まで登ったことです。われわれは山腹の洞窟のようなところで一夜をすごし、翌日三十マイルほど歩いて頂上へたどり着きました。一行は十名で、サー・ハリー（パークス）とパークス夫人もこれに加わっていました。パークス夫人が疲労にもめげず、登攀を終えたのは驚ろくべきことです。この十月という季節に、これからも富士山に登る女性がいるかどうか私には疑問です。

江戸から富士山の麓にかけては起伏に富んだ快適な道がつづき、万事順調に進みました。しかし、登り始めた最初の日、風がひどくなり、時折り激しい雨が襲ってきました。われわれが一夜を過した洞窟の中の寒さは物凄く、外では恐ろしい音を立てて雨が降り、風が吹き荒れていました。朝がきても依然として天気は良くなかったのですが、午前十時ごろから次第に回復し、午後一時ごろ頂上に着きました。頂上の寒さといったら言葉にならないほどです。

日本人はこんな遅い季節にこのつながりを私は持っていません」

T「シュピッツェさん、貴方は八千メートル峰登山の将来をどうみておいでですか？　ひとまずフェアミーンズ・M・シュピッツェさんの計画は置いといて…。今後、さらに何をすることになるでしょう？」

S「私が忌避したことを皆はさらにやり続けることになろうかと思います。それは記録に挑むということです。昔は酸素の補給を得て、最初の八千メートル峰に登りました。つまり人工的手段の助けを得てということです。私が酸素の補給なしにやれることを証明したときまでのことですが。さらにそれ以上の高度化が考えられます。それは身辺の酸素をさらに少なくして登り、それで困難さをいっそう高めるのです…」

T「つまり、その標高での空気中の酸素量を、さらに減少させるマスクを使用する！」

S「そのとおりです。登山の発展はそうして可能となるのです。ご存知のように、私はそれを拒否します。私は、もっぱら自然のままの道具立てを受けいれることで、困難さを高めているからです。モンスーン、冬、婦人たちといった。ただ、人工的酸素減少器が登山の発展を阻げないのは確かです。これで人工的に一万メートル、一万一千メートル、一万三千メートル峰を作りだせるからです」

T「そうすると記録を作る可能性はほとんど無限ということに…」

S「そうです。これは理論的に酸素の拘束なしにエベレスト登山を行なえるということになろうかと思います。それ自体、研究価値のある目標となるのは確かです。しかし、残念ながら、これは道具を使い、人工的補助手段を使ってのみ可能です。ですから、私はそういったことを忌避します。前にも言いましたが記録を求めることもです」

山に登ることはせず、われわれは危険なことをしていると注意されました。同行した〝役人〟たちは怖気づいてしまい、だれも頂上まできませんでした。彼らは寒さに耐えられないと思ったのでしょう。勿論日本人の服装は貧弱なので、それが原因なのでしょうが、私もこの点では寒さを甘く考えすぎていました。人足が洞窟まで食糧と衣服とを運んでくれたのですが、両方とも十分でないことがわかりました。洞窟は幅が約十フィート、奥行きが約二十フィートで、巨大な熔岩のかたまりで出来ていましたが、岩の隙間を風が音を立てて吹き抜けて行きました。われわれは炭を持っていったので、それで火を起し暖をとったのです」

（以下次号）

第二十一回

『この一本展』より（3）

九、山啄木鳥

赤沼　千尋著

なにか珍らしい本はないかと訊かれても、お見せできるほどのものもないので、あまり人目についていないとおもわれる地方の刊行物を出すことにした。

赤沼千尋氏はあらためて申すまでもなく、大正十年に燕山荘を建てたのをはじめとして、大槍小屋、大天井ヒュッテを経営された方。『山啄木鳥』は旧友、伊藤孝一（当時、中房谷一ノ瀬に居住）にはかって、昭和二十五年十月に刊行した随想集である。「安曇節」「山に魅せられて」「雷鳥」「おこじょ」「有峯悲歌」など十二篇がおさめられているが、みじかい表現のなかに、常時、山とむかいあっている人でなければ出せぬ味わいがあっておもしろい。のち『山の天辺』（昭和五十年刊）に収録された。

近藤　信行

十、Allgemeiners Deutsches Kommersbuch by F. Silcher & F. Erk.

Moritz Schauenburg. Baden 1920

旧ドイツ帝国時代の大学生の歌集である。今はもうないらしいが—ネパールで会った西ドイツの学生に聞いたが、知らなかった—一昔前のドイツの学生は、郷里とか主義とか信条を同じくする仲間の結社（ゲゼルシャフト）がたくさんあった。連中はしょっちゅう宴会（コンメルス）を催しては歌を唱って気勢をあげる。酒盃を挙げ、声高らかに歌って、連帯意識を固めたに違いない。日本の高校生

新刊の本紹介

東京から見える山　二七六

日本ハイキング倶楽部

サブタイトルに「日本ハイキング倶楽部創立五十周年記念山行＜東京・山岳展望の山々＞」とある。そのうちの＜東京・山岳展望の山々＞とは、日本近代登山の先駆者であり、本会の会長をも勤められた木暮理太郎さんが、東京の中心部から見出し、同定された山々のことである。木暮さんが東京から見える山の研究を『山岳』などに発表されたのは大正の初めからだが、その集大成は昭和十八年出版の『登山講座』第五巻（山と渓谷社）に載り、また、戦後は『東京から見える山々』と題した小冊子（朋文堂）となって出版されている。

その『登山講座』の「東京から見える山々」に紹介された山に、さらに十一の峠を加えて、その数二七六。日本ハイキング倶楽部が創立五十周年の記念山行として、それらの山と峠に三年がかりで登り、かつ二年の歳月をかけてまとめたのが、本書である。

「はじめに」「創立五十周年記念山行＜東京・山岳展望の山々＞の実施にあたって」「木暮理太郎による＜東京から見える山々＞の展望図」「編集にあたって」「記念山行を成功させよう」の各項を前付けとして、本文はそれぞれの山行の報告、感想、写真よりなり、また、巻末には「よくぞ登った＜東京・山岳展望の山々＞」と「あとがき」がそえられている。

本書を手にすると、B5判、四〇〇ページ余、ハードカヴァーのどっしりとした重みが、まず、感じられる。そして、山行に参加した人達の想いがひしひしと伝わってくる。ことに感想を読んでいくのが楽しく、一つの山岳会が全力をあげて取組んだ成果がよく表われている。余り好きな言葉ではないが、手作りというのが今、流行りだ。本書は、本当のよい意味での、まことの手作りといえよう。それに、創立何周年記念として海外登山などをする会もあるが、こういった地道な活動をするところはわりに少なく、かえって貴重な成果をあげているのではないだろうか。ひとくちに「東京から見える山々」といっても、現在でも登山道はおろか、踏跡さえないようなところも多い。そうした山々の記録としても、私は興味深く読んだ。東京から見える山々の多彩なことにも驚き、うれしくなってしまう。

B6判　四一三ページ　一九八三年五月発行　日本ハイキング倶楽部　非売品

（横山厚夫）

大岩壁の五十年

リカルド・カシン　水野　勉訳

イタリアのリカルド・カシンはアルプスの大岩壁登攀史上にその名をとどめる登山家だが、七十五歳の現在も旺盛な登攀をつづけている。彼はまだ過去の歴史上の人物ではない。

本書は、カシンの「五十年にわたる山との対話」をまとめた、クライマーとしての自叙伝で、イタリア版の原書は一九七七年に刊行されている。カシンほどの人物が六十八歳になるまで山行記を発表しなかったことは意外に思われるかもしれないが、その理由は、自由な時間のすべてを山登り一筋に生きた彼にとっては、文章を書くことが苦手であったからにちがいない。

しかし、カシンの率直な文章は、その飾り気のない人柄をよく現わしていて好感が持てる。それ

（旧制）が肩を組んで寮歌を高唱し、青春を謳歌したのと同じ気分であったろう。その折に歌う曲を集めたのがこの本だ。

先ず、装丁が面白い。卓上にビールが流れても濡れないようにコートしたハードカバー、その上、四隅に鋲まで打ってあるところが頂ける。ブラームスの大学祝典歌で知られる"Gaudeamus Igitur Juvenus Dum Sumus"がその表紙に打ち込んである。

一八四三年に初版が出て、この本が一九二六年で一三八版になっているから、毎年一版以上、版を重ねていたことになる。

収められている歌曲はその数八〇三、殆ど譜付で「祖国と故郷」「祝典と結社」「青春と追憶」「恋と酒とさすらい」「会飲（クナイペ）」「民謡」「ユーモア集」などの章に分かれている。中にはわれわれに親しい、山や森や狩、友情と恋、愛国とふるさと、漂泊と旅など、多くの歌が盛られていて、見るだけでも楽しい。

昭和の初め、北大のドイツ語の講師だったアーノルド・グプラー先生のところでこの本のことを知り、早速、丸善に注文して入手したが、一九二八年、高校三年の時であった。それまでは近江（ヴォーリズ）兄弟商会で扱っていた本を山に持っていって焚火のそばや雨のテントの中で歌ったものだった。この本を入手してからは、その中の歌を盛んに覚えることにして、ひところはしきりに歌っていた。

そのグプラーさんには一九三〇年に北千島に一緒した時、この本からいろいろ教わった。グリンデルワルダー・リードを覚えたのもこの旅のときだった。そのグプラーさんも今や故人となられた。これを見るたびに、スイス人らしい朴訥で、誠実で、温厚な、その人柄を偲んでいる。　佐々　保雄

十一、先蹤者自筆原稿八題

(一) 落石　藤木　九三
(二) 志賀重昂篇　松方　三郎
(三) 小島烏水君を憶う　田部　重治
(四) 槍ケ岳肩の小屋　足立源一郎
(五) 山中生活手記　平野　長英
(六) 槍岳開祖播隆について　穂苅三寿雄
(七) 酒談議　高須　茂
(八) ネパールの村人　篠田　軍治

前記八題は、山渓及び山村民俗の会に掲載された自筆原稿である。執筆年代は不詳だが、色褪せた襤褸の紙質から戦後間もない頃に彼の輝かしい数々の山行は、美辞麗句で表現する必要などまったくない。カシン自身、本書のはしがきの中で自信をもって述べているように「長い登山経験を述べたこの本のなかには、身内にたぎる熱い血潮のような、生き生きした、山とそれに属するすべてのものへの情熱がみられる」のだ。

本書は六部に分かれていて、前半はアルプス、後半は海外遠征だが、わたし自身がとくに興味深く読んだのは、やはりレッコをめぐる岩場で岩登りの腕を磨き、一九三〇年代のアルプスにおける大課題を次々と解決していった前半部だ。一九三五年に成功したドロミチのチマ・オヴェストの北壁（すでに二十七パーティが試登し、いずれも失敗していた）、一九三七年の、嵐のピッツ・バディレ北壁の初登（その後カシンはこの北壁を二度登っているが、一九七一年のとき、カシンは六十二歳、同行した息子のピエラントニオは、初登時のカシンと同じ年令だった）、そして、一九三八年のあまりにも有名なグランド・ジョラスの北壁、ウォーカー側稜の初登（モン・ブラン山群に初見参だったカシンが、この大課題を一回の登攀で見事に解決したことは、その不屈の精神力と、その技術がいかに卓越したものであったかを説明している）。

本書の後半では一九五三年のK2の偵察、隊長として成功した一九五七年のガッシャブルムⅣ、自らサミッターとなった一九六一年のマッキンリー南壁の初登、これにつづいて六九年のアンデスのヒリシャンカ南壁の初登、七五年に挑んだローツェ南壁までが語られている。

最後の一章「登山の発達と美学と」では傾聴に値するカシンの登山観が披瀝されている。

訳は非常に読みやすく、原書よりもさらによい文章になっているように思われる。

白水社　昭和五十八年六月　四六判　二八〇頁　定価一九〇〇円

（近藤　等）

大登山家の歴像

ロナルド・W・クラーク著
杉田博訳

著者のロナルド・W・クラークは伝記ものの著作によいものがあるようで、この原本もそういった実績のうえに立って、一般向けとして出版された本のようである。したがって、ウィンパーをはじめとする六人の登山家のものがたりは、ほかのもっと詳しい評伝とか、それぞれの登山家の著作から引用され、まとめられたものである。それをあえて翻訳刊行することにしたのは、最近の先鋭的山登りを志向するわが国の登山者のなかに、こういった登山家の名前すら知らない者がいるからだと、訳者は〝あとがき〟で述べている。

本書の中で語られている六人の登山家のうち、ウィンパーを除く五人は、ともにイギリスの山、主に岩場でクライミングの術を身につけ、アルプスへ、ヒマラヤへとでかけていった。特に目につくのは、ACの会長も歴任したコリーが母国の岩場をこよなく愛したことで、自分の国に寄せる愛情を感じさせる。この叢書が一般向けに出されたという意図がわかるような気がする。

ハントの小伝を書いたところでは、ハントが登山を定義した言葉を引用し、登山には段々と深みに入っていって、さらに遥かな目標へ進ませようとする刺激があるが、その裏には堅いつながりをも揺がせる危険がある。これが登山の決定的な特質となって、人種問題、主義主張、思想の相違、言語の違いといった問題を乗り越えている。これが特異な登山というスポーツだ、といった教義ともいえそうなハント言葉を、著者は、マロリーが言い残したという言葉、「何か崇高なものが登山の本質である」に結びつけている。これが著者クラークの理念なのであろう。

さいごにひとこと、この訳書では参考図書ノートに『遥かなりエヴェレスト』（島田巽著）が上げてあるのに、ノエル・E・オデー

のものであろう。

随筆八題の解読は不能だが、各題夫々に、活字に組まれた窺知できない他所行きの顔の背後に、著者の肉筆は自己韜晦を峻拒して、奔放に魂の凝縮とその敷衍とをみせてくれる。

人は顔の表情や言葉から、逡巡や心の装幀を尋ねるけれど、舌上千転、筆鋒の赴くひびきは行間を埋めて捨てがたい。

この自筆原稿は、先輩から山内を入手した折の余禄の一部だが、躊躇低徊の身に余る。平柳　一郎

十二、諸州採薬記　全

植村政勝著

江戸時代の秀れた本草学者植村佐平次政勝が宝暦五年（一七五五）将軍吉宗に献じた本書については、小林義正氏が『山と書物』に「本草学者植村政勝の登山記」と題し、立山、富士山、鳥海山の登山記を中心に解説をされており、ここに改めて述べることはない。

小生所蔵の本書には寛政十三年（一八〇一）二月十一日、吉沢好道これを写すと、末尾に記されている。植村政勝と本書に関する研究は、松島博著『近世伊勢における本草学者の研究』（昭和四十九年、講談社発行）にくわしいが、昭和五十七年三月、国立国会図書館山書を読む会により、国会図書館所蔵伊藤篤太郎文庫の一冊が全文影印・翻刻されているので、あわせて持参した。　山崎　安治

（完）

東・西　南・北

わたくしも訂正したいこと

村井　米子

「山」四月号（486号）七頁所載の、望月達夫氏の「訂正しておきたいこと」を拝見して、わたくしもまた訂正しておきたいので筆をとった。

年次晩餐会でお話したのは、「アルパインクラブにならって、女子会員を入れなかった日本山岳会……」ではなくて、「女子会員を入れたがらなかった……」である。この点を訂正したい。

戦前、事務をとってらした額田さんも「女子の入会はありがたくないんですよ」と苦笑された。松方三郎さんも「アルパインクラブでは入れてないね、女子は別の会をつくっている」英国でのご自身の体験から、ささやかれた。

とはいうものの、いろいろの会合には参加させて下さった。小島烏水氏が滞米中、三会堂で講演なさったときなど、小島氏にわたくしを紹介して下さったので、そのルをオーデルとしている点が気になった。

昭和五十八年八月二十日　現代旅行研究所刊　定価二五〇〇円

原著 SIX GREAT MOUNTAINEERS

（岡沢祐吉）

追悼　前田　浩

神戸山岳会

本書を手にしてまず目を見張るのは、数多くの、そして多彩な人々から寄せられた追悼の言葉であろう。それは単に前田さんの交友の広さを物語るだけでなく、その人柄を伝えるものでもある。ある人は「真の教育者」とたたえ、岳友からは「かけがえのない先達」としてしたわれる。そして六甲を愛する市民団体の人からも「有難う前田さん」と賛辞をもらっている。

それらは、単に数十年にわたって山を愛し山登りを続けて来られた前田さんの登山家としての姿だけではなく、前田さんの人生そのものへの深い感銘が追悼の言葉となってあらわれたものである。

同じ登山家である藤木高嶺氏も「世話好きというようなまやさしいものではない。人のいやがることでもなんでも卒先して引きうける、人のために尽くす、というのが前田さんの生きざまだったと思う」とのべているし、ある人は「人生の師」と仰いでいる。そして僧職の方からは一遍上人になぞらえて、「遊行の人」とたたえられるのである。

もちろん、だからといって登山家としての前田さんの功績は高められこそすれ低められるわけではない。昭和初期から始められた登山は戦中のわずかな時期を除いて止むことなく続けられた。前田さんの年譜を繰ってみると、北から南まで、その足跡の広さに、ただただ驚かされだけである。中でもすばらしいと思うのは、五十歳をはるか過ぎてなお、というか、むしろますます旺盛な登山への情熱から、P29、マウント・レーニア等の登山隊長をつとめられ、ネパール、ブータン、アルプス等への山行などまさに死の直前まで登山を続けられた。追悼文にもあったように、まさに壮烈な戦死だったとも言えよう。そうした登山の中で前田さんが折ふしに感じられたこと、考えられたことは、それらが収められた紀行、随筆に生き生きと描かれている。特にブータン、ネパールの紀行文は読む者をも楽しくさせてくれる。

さて、前田さんのもう一つの面は、日本の山岳界への貢献である。前田さん自身が「わしは岳連の運営にからだ張っとるんや」と日ごろ言われていたことが、追悼文の中にも出てくるが、まさにその通りであったと思う。単に兵庫県というよりは、全国的なレベルで山岳団体の組織化と運営に努力され、国体登山で前田さんの姿を見なかった年はないといっていいほどであろう。その根底にあった前田さんの理念は、本書に収められた「一般山岳会の組織と運営」という論文にもにじみ出ている。

前田浩さんのすばらしい人柄と輝やかしい登山歴、そして山に対する敬虔な愛情と、登山へのたしかな目を伝えてくれる一本である。

昭和五十八年九月二十三日刊

前田浩追悼集編集委員会編集

神戸山岳会発行　三二一ページ

非売品

（野村哲也）

未踏への挑戦

―加藤保男の生涯―

田中館　哲彦著

本書はまず「クライマー・保男誕生」の描写から始まる。高校三年の夏休み、兄、滝男らが創立したJECCの穂高合宿に誘われて参加、初めて岩登りを経験する。そして六九年のアイガー北壁の登攀が、クライマーとしての道を本格的に歩み出す転機となったことが語られている。そのことは自著『雪煙をめざして』のなかでも、あるいは本書のあとに出版された、母堂、加藤ハナ著『エベレストに消えた息子よ』のなかでも指

後、お手紙のやりとりでもきた。

戦前の虎の門の事務室に寄って、図書も見せていただいたし、額田さんに仰せられてわたくしの著書も呈上した。

女子の入会者があったことも聞いたが、わたくしは招かれざる客になる気はなかった。そのころ洗足高女の前田岩尾校長等と、女子の山岳会を持っていた。

ところが、戦後、日本山岳会が日本体育協会の一部門、「山を担当」することになった。それまでのクラブ風なありかたから、一般大衆向きに改める必要が生じた。（今はまたクラブに還ったが）

そこで、女子も大いに入れることとなったから入会して手伝うようにと、大正時代からの山友達、松方三郎さん、入澤文明さんに招かれ入会した。（一九四七年）

会の組織も各地方支部を設ける必要ができ、一九四七年から東京支部をつくることになり、一年間ほど支部長をつとめた。（十数年後、東京支部は止めた）

現在は、もう初代の各支部長も多く他界されたし、記録も不充分らしいから、ついでに書き添えたい。（一九八四・五・二〇）

春のナムチェにて

大河原由紀子

今年の春、三月初旬、数日をネパールの東部、エベレストの麓にあるナムチェバザールの村で過しました。

一週間だけの休暇で、足の向くまま気のむくまま、カトマンズより、まず飛行機で四十五分のルクラ（二九〇〇㍍）に飛び、ルクラより二日のトレッキングで、ナムチェの村に着いたわけです。

今年はネパール全土、平年並みの気候で、ルクラのあたりでは地上、数センチのところに花をつける桜草が花ざかり。

しゃくなげの蕾も大きくふくらんで、あと数週間もすれば、人の頭ほどもある大きなぼんぼりのような真紅のしゃくなげが、街道すじで旅行者の目を楽しませてくれるでしょう。

険しい登りを終って、村の入口の大きな石をまわると、ナムチェの村が、一望のもとに「わっ」という感じで目に入ります。

この村の標高は、三四四〇㍍、百戸あまりの石造りの家が、すり鉢状の急斜面にかたまり、村の向い側はポテコシ河が、切り立ったはるか下部を流れ、そこから急にコングデ山（六一八七㍍）が聳え立ち、ナムチェ側にべったりついた碧い氷が音をたてては落下し、春の訪れを知らせています。

ナムチェの村は、四方どこも山に囲まれ、どの山も高く、目を高くあげなければ山の頂上が見えないくらいです。

急斜面に耕やされた、猫のひたいのような村の畑は、じゃがいもの植えつけの時期で、シェルパニ（シェルパの女性）が、高い澄んだ声で歌を唄いながら、仕事に励んでいます。高い空ではワシが舞い、シャンボジェの丘には、タルチョー（チベット人が祈願のためにたてる旗）が風になびいています。まったく静かな音のない世界で、すばらしい雰囲気でした。

久しぶりに訪れたナムチェの村で、一番驚いたのは、やはり電気が入ったことでした。昨五十八年一月より、この村に初めて電気が入ったのですが、これはこの村のロールワリン寄りにあるターメ村の小規模な水力発電（三六kw）によるものとのことです。

今のシーズンは水も充分でないので、約一〇kwしか村では使えず、電灯のみに限られています。時間も午後五時から十時三十分まで。一軒について一ケ月の電気代が、一二〇ルピー（約一、七二五円）とのことで、夜ともなると、どの家でも電気はつけっぱなし。すり鉢状の部落なので、夜景は本当に素晴らしく、しばし庭に出て見とれておりました。電灯の数より多く、降るような大きな星々。文明の灯と、自然の灯が一体となって、この村だけが宙に浮かんでいるようにさえみえました。

摘されていることであり、そういって間違いはなかろう。ところでこの章で、外観は楽天的で暢気に見えても、加藤保男が探究心が旺盛でかつ将来を見通し、地道な努力を積み重ねていく男であった証として、日大文理学部の卒業論文の例が紹介されている。私もそれを読んだことがあり、たしか、高所での身体に受ける生理的影響を取り上げたものだと思うが、かなりレベルの高い論文だと感じた記憶がある。

次章では、保男が第二次RCCの日本エベレスト南壁登山隊に加わり、ポスト・モンスーン初の登頂者となったこと、帰路、頂上直下で酷寒、強風下でのビバークを強いられながら、劇的な生還をした模様が記述されている。そしてこの登山を契機として、彼の登山目標が〝岩壁から高所へ〟と変わっていったとされている。たしかにそのことも、それ以後の実績が証明している。この章で、保男が兄から〝山に入ったらとにかく食べて体力をつけておけ〟というアドバイスを受けるくだりがある。余談になるが、私もチョモランマで、彼の健啖ぶりと強さを見て驚嘆したことを思い出す。まさに〝胃力は馬力、登攀力〟なのであろう。

Ⅲ章「新たな登山人生をめざして」では、凍傷による入院生活と、そのあいだの本人の人となりを表わす幾つかのエピソードが語られ、不屈の意志を示す復活のためのトレーニング、ナンダ・デビィ、マナスル、チョモランマ等での活躍の様子が述べられている。

Ⅳ章とⅤ章「厳冬期エベレストへの挑戦」「最後のアタック」では、多くの関係者の談話、証言を集めて、改めて加藤保男の人柄、登山観が描かれ、周到な準備、いつもとは違う出掛けの挨拶、順調な出だしと、その後の苦闘ぶりに続いて、登頂成功後〝雪煙に消えていった〟アタックの模様が、当時の家族の気持ちとともに、臨場感をもって記述されている。

最終章では、両親に寄せられた幾通かの手紙と身近な友人たちの登山観、保男観が紹介されている。

本書の中で一貫して述べられているように、加藤保男がクライマーとしてたぐい稀な資質をもち、素晴しい家族に育まれて、多くの人達に愛され、また生きる励ましを与えてきたことは、誰しも等しく認められるところであろう。好漢、保男が、短かくともいかに充実した生を送ったかといった視点に立脚しつつ、そうしたことをドキュメンタリー風の構成を採りながら、そつなくまとめているという印象を受ける。

一九八三年十月一日発行　汐文社　二一八ページ　定価一二〇〇円

（浜野吉生）

図書紹介

順次、電気の容量も増えれば、この村の歴史も大きく書きかえられるでしょう。

秋田支部総会報告

昭和五十九年度の秋田支部総会は、去る五月十三日午後一時より、秋田市の労働福祉センターにおいて開催された。

福田副支部長の開会の言葉に始り、出席会員ならびに委任会員を確認。岡田支部長挨拶の後、支部長を議長に指名し議事は進行された。

◎昭和五十八年度事業報告
◎昭和五十八年度決算報告
◎昭和五十九年度事業計画
　山行（真瀬岳、東山）、その他
◎支部規約一部改正
　現行年額五百円を千円に改正
◎昭和五十九年度予算案
　十四万円。五十七年以前の未納についても再請求を続ける。
◎その他
　本年六月を以て二十五周年を迎える。記念山行と記念品を検討。指定宿泊所の承認、その他
◎支部会員確認
　五十一名。新入会員二名申請中
　以上承認され、続いて副支部長以下の役員改選に入り、懇親会の後、午後六時散会した。

新役員は次の通り

顧問（柴田均二）支部長（岡田光行）副支部長（福田文二）委員（進藤昭、佐藤兼治、佐々木民秀、中川広三郎、藤原健、北林嘉鶴子、高橋守）監事（抑谷正義、子吉格郎）

（佐々木民秀）

雪深き越後路の春
玄さんの傘寿を祝う会

越後支部

近年稀れな大雪を迎えた越後もあと十日で桜前線の到来する春四月二十二日、「玄さんの傘寿を祝う会」を支部会員の発起で玄さん縁りの地、飯豊連峰杁差岳の麓、雲母（キラ）温泉清流荘で開催した。

当日の司会役、平田大六会員にうながされて立った佐藤一栄支部長は、藤島先生の飯豊の風雪五十年も一昔、ここに傘寿の会を開催するにあたり会員の皆さん多数ご参会いただき発起人を代表し厚く御礼申し上げます、と挨拶。

評議員、片岡博さんより佐々会長の祝辞を兼ねた挨拶を頂く。

奈良の会員、坂口圭正さんから第三回国体（福岡県、九州大会）の帰り、玄さんに奈良にも山らしい山があるのか、と聞かれたのが縁で大台ケ原、大峯と案内して以来、三十五年の奈良と越後の交流が始まった、と玄さんと縁浅からぬ回顧談をまじえた祝辞を頂く。

会員、室賀輝男さんは地元を代表して玄さんは私ども越後人の良き羅針盤でありこの先もっと私どもをご指導いただきたい、と挨拶。

本日参会できなかった会員から託された白いスカシユリの花束を、割れんばかりの拍子のなか女子会員の手で玄さんに贈呈する。

大阪から駆けつけた井上亮平さんは、戦中の食糧難時代に玄さんと二人で越後側から飯豊山に登拝した折、御西岳まであと一歩という所に周辺一面に可憐な花が咲き乱れている池をみつけ、その日の泊り場にした。その時の池を玄さんは私の名に因み「亮平の池」と名付けた。それから四十年、相変らず若い玄さんを見るにつけ、玄さんを友にできて嬉しいと挨拶。

奈良の会員、米沢清さんは玄さんの傘寿を祝し、「越後の山の隅々に　残す踏跡（アシアト）　文書の跡（アト）…」と自作の詩を披露し万来の拍手。

会員松田雄一さん始め県内はもとより県外からの祝電も多数披露された。

会員斎藤平七さんより、参会者一同からの記念品として玄さんに羽毛布団一組を贈呈、司会者はすかさず早速今晩から奥さんと使って益々元気でと言葉を添える。玄さんも感極まり、唯々ありがとうの一言、奥様から、藤島は世界一の幸せ者と喜んでいます、これもすべて皆様のお陰と声を詰らせての御礼の挨拶。

参会者八十五名で玄さんを真中に記念写真、と続き、乾杯は会員、佐久間惇一さんが音頭をとり、玄さんの長寿を白寿までと願い一同乾杯、祝宴に移る。

宴席が始まればそこは越後人、玄さんは記念の色紙書きに大忙しであるが、その玄さんをよそに隣同志は山談義に花が咲き、酒よし、ビール良しで車座となり、広い会場も足の踏場もない程。果てしなく祝杯を重ね、幹事はてんてこ舞い。

尽きぬ話に花が咲き、酒瓶もあちこちでゴロゴロ、時の経つのも忘れた越後支部、春一番の祝宴が延々と続き……最後に会員、五十嵐篤雄さんが、玄さんありがとう、益々の長寿を祈りますと締めの萬歳三唱。有意義な春の一日を友と過ごした満足感を胸に、参加の会員もそれぞれ山での再会を約して夕闇せまる雲母温泉をあとにした。

参会者・（順不同、敬称略）（大阪）井上亮平（京都）土倉九三（奈良）坂口圭正、米沢清（東京）斉藤桂、宅間清子、竹田政義、田仁代（千葉）滝口豊子、滝口純、矢島省吾、鈴木介伸（神奈川）佐々木幸作（山形）佐藤節子、斉藤喜一、栗田栄二（福島）矢田目昇、佐竹信幸（越後支部）佐藤一栄、斉藤平七、大山昭一、山田勲、佐藤俊彦、高橋庄一、井口正男、山田一介、倉島庄吉、北村猛、赤沢清明、平田静一郎、上村幹雄、浪花徹、藤井与嗣明、片岡博、柳沢一男、佐藤貞一郎、二瓶斉、金山淳二、室賀輝男、奥津五郎、大味精司、佐久間惇一、清野正二、杉原八百樹、五十嵐篤雄、小早川又一、松本英一、小倉敏子、平田大六、渡辺竜吉、斉藤チヨ、山崎幸和、早川英夫、酒井定勝、荒木吉栄、小泉喜重、酒井春一、鈴木敏雄（会員外）藤島嶺樹、藤島幸子、小松イツ、棚橋健吉、土田イネ、間瀬昭二、本間吉明、金子功、永原志良治、佐藤徳松、小川聲、曽山志計雄、田村祥司、加藤正、前田七三郎、小林兼一郎、久保勝司、信田瑠美子、坂野雅之、横野久和、吉田正己、石井初江、間瀬春正、高橋真雄、高橋賢吉

（記事・鈴木敏雄／写真・高橋庄一）

会務報告

五月理事会

5月7日　午後6時30分
場所　本会ルーム

出席者　佐々会長、田口、山田副会長、田村、神崎、大倉、西村、水野、平井、絹川、鈴木、梅野各理事、小倉、松田監事、鴫原、中村評議員
委任・欠席　赤松、河村、松家、平野、長谷川、村木、皆川、高遠各理事、飯野、宮下、山口評議員

報告事項

◎八十周年記念事業報告
(1)行事分科会
○百年史編纂のため準備を開始、担当望月達夫会員にお願いする。
○将来、山岳博物館を設立するため資料集めが必要であるが、「山岳博物館を考える会」を発足し、研究を進める。
○昭和六十年六～十月、「山と人」をテーマに八十周年記念展を開催することで準備を進めている。
○カンチ遠征の報告写真展を六月～七月開催で準備中
(2)集会分科会
○記念集会の支部別のくくり方を支部長会議で意見を聞いて決定したい。
(3)募金分科会
○現在四百通募金の申込があり、口数は平均二口である。当初のもくろみより低いのでリストを作成して再度依頼したい。
◎次回支部長会議について
記念集会開催の件が主な議題となる。
◎会員番号一四三六の月原俊二会員の永年会員推薦が事務手続上も

お知らせ

☎ 234-6659
この電話でもお知らせしています

◎ビールパーティ

日時　九月一日(土)午後六時半
場所　日本山岳会集会室
会費　一五〇〇円
婦人懇談会

＊　＊

◎スケッチ山行

九月十五日（土）～十六日（日）
焼岳小舎
講師　清野先生

◎秋山山行

十月六日（土）～七日（日）
摩耶山
山形支部共催

◎きのこ狩山行

十月二十日（土）～二十一日（日）
志津倉山
喜多方在住、矢田目　昇氏（会津会）の協力で
集会委員会

＊　＊

◎〈シンポジウム〉

ヒマラヤの生態系について

日時　十月二十七日（土）午後一時～八時
場所　未定（東京都内）
講師　交渉中

本シンポジウムの内容についてのご意見、ご希望などありましたら、科学研究委員会までお寄せ下さい。

また、当日発表希望がありましたら当委員会宛お申込み下さい。

◎紅葉探索山行

一、日程　昭和五十九年十一月十日(土)～十一日(日)

今年は「沼津かもしか」のお世話で、山間の別天地、上徳間の民宿坂口荘に一泊し、紅葉や樹木について講師の話を伺ったあと、懇親会。翌日は紅葉の美しい樽峠へ。ここで二班に分かれ、一班は高ドッキョ（一、一三三・六米）登山、一班は峠付近の草や樹を賞で徳間に戻り、富士駅帰着、一八時ころの予定。

一、集合場所　東海道線富士駅改札出口。
一、集合時間　十一月十日（土）一五時二〇分
一、宿泊　坂口荘
山梨県南巨摩郡富沢町上徳間
一、申込〆切　十月三十一日
一、募集人員　先着三〇名（他に沼津かもしか約一〇名参加）
一、申込方法　必ずハガキで、日本山岳会事務局内科学研究委員会宛。住所、氏名、会員番号、性別、年令（保険のため必要）を記して申込んで下さい。
一、費用　往復のマイクロバス、一泊三食、講師謝礼、保険料など含め、一人九〇〇〇円（非会員一〇、〇〇〇円）は現地徴収。
一、地図　静岡図幅五万分の一地形図「南部」「清水」
一、参加される予定の方には諾の返事と案内をお届けしますが、やむを得ず欠席される場合、前日までに連絡して頂くほか、三〇〇〇円お支払下さい。

科学研究委員会

＊　＊

◎今年の山岳図書交換会

図書委員会で行っている恒例の山岳図書交換会は今年で十七回目を迎え、**十月二十七日（土）午後二時から本会ルーム**で行われることになった。この会は初め松方三郎氏の提案で発足したのだが、自分の手もとにある不要な山の本を持ち寄り、必要なものと換えようというのがその趣旨であった。

最近ではすっかり会員の間で定着した集りとなっているが、その反面この集りだけに顔を出すといった会員も増え、メンバーがあまり変らないという点が少々気になっている。もっと新しい顔振れがどんどん出てきてもらいたいと思う。山岳図書はこのところ古いものはなかなか手に入りにくく、古書店でも相当な値段だが、この集りにくれば市価よりずっと安く、しかも珍しい本が手に出来るのである。

お手もとにある不要な山の本はわざわざ古書店で処分するのもめんどうだし、といってくず屋に持っていってもらうのも—という会員の方はかなりおられるのではないかと思う。この機会を利用してルームへ持参していただくか、あるいは多量の場合は図書委員がうけ取りに参上することになっているので、図書委員会あてご連絡いただければ幸いである。

また販売価格については図書委員会にご一任いただきたく、古本屋で一万円で並んでいるから一万円といわれて出品されてもちょっとこまるのである。一万円で古本屋に並んでいても、その本を売る場合となると、その三割程度である。図書委員会ではそれにプラスアルファして値段をつけることになっているのでご了承をいただきたい。

今年も楽しい集りにしたいので、出品ご希望の会員各位はご遠慮なく図書委員会へご連絡下さるようお願いする次第である。なお売り上げ金額の一割はルームへ、一割は図書委員会へ寄付いただくことになっているので、この点も申し添えておきます。

図書委員会

れていたので追加したい。
◎木暮祭の祝金について
最近支払われていないが本年よりお願いしたい旨会員より申出があり調査したが、本部より会長・副会長等が出向く場合、祝金を持参しているが、他の場合は支払っていない。現在年二回開催されているので、それらを含め支部長に問合わせ検討する。
◎委員会報告
○山研　道路開通が五月一日となり五月五日開所した。
○山日記　実売は千五百部前後と少ないのでこの点を含み来年五〇号となるので種々検討してみたい。なお会員手帖としたらどうかとの意見もある。

審議事項

○監事任期満了につき竹田寛次氏（早大OB、昭四〇～四四理事経験者）を推薦する。
○青年会員について
前々回より出されている問題であるが、入会金を二十五歳以下は免除する線で総会で提案したいが、総会議案の内示について問題もあるので、取り扱いをどうするか常務理事会で検討する。　了承
○会報担当者理事交代について
皆川氏より岡沢氏に交代。　了承
○成瀬岩雄氏未亡人より寄附金の件
別途長期計画準備積立金として処理する。　了承
なお、図書の売却についても話しがあり現在検討中　以上

ルーム日誌　五月

4日（金）常務理事会
7日（月）理事会
8日（火）総務委員会
14日（月）図書委、山岳博物館懇話会
15日（火）会員懇談会
16日（水）三水会
17日（木）80周年出版小委
18日（金）支部長会議、59年度総会（主婦会館で）
22日（火）山菜勉強会
23日（水）科学委
24日（木）会報編集委
28日（月）医療委員会
今月の来室者411名

会員移動（五月）

名前訂正
1971　吉永　隆行→孝行
支部長交代
信濃支部長4711　奥原教永→4505　蒲生明登へ
支部事務局変更
石川支部　金沢市泉本町1―74　多野　正一方（076）2）44―7416
会員番号変更
9212　大橋　克也→2534
物故
5726　植村直己（3月）
1259　水野　祥太郎（5・10）
4272　水野　政博（58・11・21）
退会
4702　吉田　薫
5011　関本　一男
6255　山本　正子
6991　西宗　昭
9158　高橋　泰三
支部変更
8646　奥原　宰　信濃支部へ
1936　三石　清　東海→他へ
8557　勾坂　馨　岐阜→宮城へ
永年会員追加
1436　月原　俊二

八十周年記念事業募金応募者ご芳名（昭和五十九年六月九日まで、敬称略、順不同）及びお願い

一、募金の応募申込は七月末までとなっておりすまが、お申込み未済の会員は是非ともご応募下さるようお願いいたします。
二、追加応募をお願いしている会員で既に申込みをされた会員は六月九日現在の口数で掲載しております。
三、応募申込書に氏名住所の記載のない会員、申込書がなく送金済の会員がおりますが調査の上、次回に掲載いたします。
四、ご芳名（一口金五千円）
（二〇口）遠藤恵太、尾上昇、田口二郎、竹節作太、外山義夫、港叶、山田二郎（東京）、飯野亨、村木潤次郎、中田清兵衛（一〇口）青木昇、辰沼広吉、松田雄一、渡辺宏之、渡辺兵力、木下是雄、片岡博、加治甚吾、佐藤春郎、柴田均二、鴨原啓佑、鈴木郭之、中村純二、西村政晃、橋本竜太郎、早川種三、浜野吉生、細川沙多子、藤山愛一郎、（六口）赤松功也、大倉昌身、太田敬、織内信彦、高田光政、宮原利重、小林太刀夫、坂倉登喜子、野口秋人、原　蕃、湯浅道男、山口節子、（五口）黒石　恒、村井米子、（四口）牧野　衛、阿部慎二、愛知学院大学岳士山岳会、岩崎三郎、岡田光行、小田稔、岡村治信、高遠　宏、武村市太郎、高橋　詢、鶴岡元之助、富田健一、曲義則、宮崎辰雄、村上勝太郎、鏑木昇、河野幾雄、金山淳二、木村義昌、佐藤久一朗、里見清子、鈴木嶋夫、関塚貞亨、長尾悌夫、永井俊三、浜野正男、羽田英彦、堀川英司郎、藤井　保、山崎金次郎、（三口）山野井武夫、吉沢一郎、増本　茂、泉尾忠志（二口）中村テル、沼田　真、日本大学理工山岳部山稜会、錦織英夫、西丸震哉、名須川浩、中田　勇、中村あや、中川竜一、中山真明、中山俊夫、早川瑠璃子、早坂礼吾、橋本祥案、馬場　猛、本多夏生、伏見紀子、藤崎昌美、古川利雄、藤野欣也、古谷聖司、平野　明、姫野和記、平戸孝夫、吉田　満、同三智子、吉原竜介、吉田紘臣、吉村健児、湯浅充泰、山口政一、山田明吉、山田和雄、山口一孝、八木原博子、同茂明、山本武志、山川　力、山田二郎（京都）薬師義美、山路岳夫、大森薫雄、岡沢祐吉、小田和友蔵、大友　繁、沖　允人、太田徳風、大橋秀一郎、高田真哉、橋　真琴、田部井淳子、伊藤祐道、泉隆次郎、岩坪五郎、岩坪昭子、岩崎忠昭、岩下三男、岩下香代子、内山脩一、大里祐一、大橋克也、秋山光男、井上　保、板橋元一、石川治郎、市川義輝、池田剛、池元善秋、市川正、石橋正美、石原重徳、久保一陽、熊谷太三郎、山本光二、石沢六郎、薬科光雄、青木　巌、相原軍一、秋月良造、安間荘、青木督平、森元一、守田治夫、渡辺国治、渡辺良一、金尾　実、川田善朗、柿原謙一、金子泰助、雁部貞夫、片山隆市、宮本信一、三宅健治郎、宮川欽治、三上博民、同智津子、村山雅美、陸田峠郎、麦倉啓、森信昭二、望月阿香実、望月　孝、長嶋正浩、工楽英司、久保孝一郎、竹田寛次、高本孝、高沢光雄、竹田　暉、田上敏行、茶谷東海、千葉重美、辻井秀一、堤甚五郎、鶴見敏彦、津田康祐、寺村栄一、土井高夫、冨田郁夫、松沢幸澄、松井美恵子、松岡　繁、加藤比呂志、亀谷外毅雄、加賀　勝、亀井秀子、川俣俊一、北原正宣、木村勝久、岸栄、菊池武昭、国司吾郎、小田島政行、太田晃介、織田沢美知子、太田　繁、小田知枝、岡本如矢、大野義徳、岡部みち子、大洞陽一、小倉　厚、慶応義塾体育会山岳部、見学玄、国分勘兵衛、小浜浩三、小松原一郎、小島隼太郎、小林重一、近藤友好、小林　年、小池恭弘、斎藤かつら、佐藤浩幸、佐々木康之、斎藤健治、佐々木宏、佐藤金一、佐藤耕三、斎藤惇生、霜田嘉一、関根吉郎、島尾久子、島田義昭、進藤波男、神保信雄、白石栄三、上善峰男、杉田　博、菅野時子、関口周也、関山温子（一口）加藤　栄、重村伝平、塩沢　厚、設楽芳夫、島津慶子、嶋田晃一郎、清水佐二郎、島　汀子、井上孝二、相山之良、安藤文子、安斎正明、安藤信正、秋山光平、新井規夫、淡川舜平、安藤久男、荒木　昭、石原金洋、弥栄山岳会、市川章弘、一力英夫、飯沼敏男、池原信

吾、池田知幸、飯野信、二志幸夫、岩崎英宣、雨宮宏光、赤松　光、足立勤、荒木康雄、安部昌、山本一夫、山森欣一、山川三千雄、山本忠誉、八巻寿、新日本製鉄八幡製鉄所山岳部、第一勧業銀行山岳会、牛山大六、熊谷松雄、岡田幸千生、太田義一、越前谷幸平、遠藤泰孝、永髙　賢、上野英世、内村鉄次郎、植田佳徳、宇津力雄、上杉嘉孝、牛田清彦、井出賢三、井後幸太郎、糸賀忠彦、伊藤正俊、池沼　慧、宮本貴文、冨田弘平、戸谷　翠、鳥海宣和、東京農業大学農友会山岳部、冨永重夫、徳永篤司、照内　豊、寺田鬼久麿、辻田代史雄、高村奉樹、高岡周夫、田島　汎、武田益太郎、田辺　潤、滝　和美、高橋宏一、田川義久、高辻謙輔、田中幸男、田中壮佶、高橋俊紀、田村寿男、田中貞夫、田中賢治、滝口操、滝口　脩、谷　久光、田尾　正、田原善治、小畑恵市、小栗　宏、織笠巌、小川安久、岡本丈夫、大久保五郎、大野紀和、小川　務、大竹幹衛、大井正一、大木淑子、荻野和夫、大須賀俊彦、沖永　裕、大熊良幸、大谷洋生、岡田俊夫、大貫久夫、岡本信夫、大口瑛司、磯村義宣、石原俊洋、稲田定重、磯田和夫、伊藤　茂、岩田修二、市吉明子、石井貞男、井村桂子、井古田忠男、羽賀育子、羽賀克己、林雄吾、萩千賀、芳賀成明、羽賀一蔵、原田幹市、橋爪幸達、萩原邦良、長尾武彦、古内克己、古川竹世、幣内規男、本多勝一、細川武光、本間志美、平山武志、平井国之助、橋本誠二、針谷迪夫、藤井明、福田正則、船木威志、古屋学而、藤野澤活、福久米之助、福田文二、福田光子、古川文男、藤平正夫、米沢典之、吉永定雄、吉見良一、横山厚夫、平野興一、平田大昭、広瀬正弘、平井和雄、平野義明、東真澄、山崎　健、矢萩久雄、柳　正博、湯川竜二、湯山直文、吉野正敏、横山隆、吉田光吉、横山忠信、吉富　亨、茶谷徳行、山田恵三、山田一男、山田硅二、内藤俊夫、名塚達夫、中西豊和、中園喜一郎、中村一雄、名越昭男、成川隆顕、長坂英一、中島　隆、中川和道、中野　明、新田隆三、日本興業銀行山岳ハイキング部、西本正行、仁王一成、西尾俊子、野沢　豊、野田福五郎、中野英次、副島勝人、副島広之、祖父川精治、瀬川忠四郎、関本俊雄、鈴木耕治、鈴木一弘、柳谷正義、山口晶一、矢沢義弘、柳沼シゲ子、山野井哲朗、山田　猛、山口京一、山田靖子、山里寿男、山口滋嗣、葛西森夫、加納　巌、梶田民雄、金沢喜八、片谷恒三、川井英憲、神谷恭平、加治川栄二、川上光久、狩野芳郎、清野　務、菊地正蔵、木村　真、金井五郎、金　成忠、加田勝利、影山英雄、川北仁、神谷恒吾、河阪一造、葛谷凱治、熊谷正志、熊谷藤子、久野木誠、久木春男、北川豊培、木本善重、北林嘉鶴子、菊池健介、桐生恒治、小滝清次郎、古賀康義、子吉格郎、国分恒司郎、小西喜助、近藤暉、小比類巻尚美、小林猛臣、久保田昭二、久保田保雄、佐々木徳次郎、佐伯節子、佐々木誠、三枝礼子、斎藤直信、坂口三郎、五月女進一、佐々木孝雄、寒河江誠、小森光子、庄　定人、柴田昌亮、庄司長生、境野俊男、佐々木善民、佐藤隆男、佐藤節子、斎藤清吉、真田匡三、坂本真生、松井忠治、松久幸司、松野賢珠、松岡憲二、松井二夫、松長晴利、伴野　清、土石川勝司、富田記一、土合敦彦、宮島孝一、三木　亮、見沢繁幸、宮崎　稔、宮入保徳、宮前淑子、宮崎幸博、丸野貞彦、牧　繁録、松葉明、森田　忠、森谷昭男、本片山数雄、村木康義、宗実慶子、村井竜一、村上賢二、宮川政明、三谷忠男、南崎大海、渡辺誠司、渡辺嘉男、渡辺健二、脇坂順一、鷲尾　顕、若浦義弘、早稲田大学山岳部、力丸茂穂、本吉　博、森谷周野

図書受入報告

図書委員会

昭和 58 年 12 月分受入図書（つづき）

14　阿保喜代春著「残丘は雲の上に」著者　1983（著者寄贈）

15　神戸山岳会編「追悼　前田浩」　1983（編者寄贈）

昭和 59 年 1 月分受入図書

1　野口久義著「蔵王連峰　坊平ペンションだより」山と渓谷社　1984（版元寄贈）

2　ハケット著栗山喬之訳「高山病」山洋社　1983（版元寄贈）

3　横浜山岳会編「創立五十周年記念誌」　1983（編者寄贈）

4　武蔵大学人文学部日本文化学科編「上波田の生活と伝承」　1979（和田慎氏寄贈）

5　武蔵大学人文学部日本文化学科編「赤城山麓柏山の生活と伝承」　1983（和田慎氏寄贈）

6　中田勇著「一等三角点標高順一覧表」一等三角点研究会　1983（著者寄贈）

7　脇坂順一著「七十歳はまだ青春」山と渓谷社　1984（版元寄贈）

8　日本ネパール協会編「シンポジュウム・ネパール　第 11 回ネパール研究学会　1982 年」　1982（編者寄贈）

9　中野融著「Trekking in Nepal ネパールヒマラヤ・トレッキング案内」山と渓谷社　1984（版元寄贈）

10　関根幸次　中庄谷章　岩崎元郎編「日本百名谷」白山書房　1983（版元寄贈）

11　谷川・妙高と上信越の名山（日本の名山）ぎょうせい　1983（版元寄贈）

12　Chamberlain, Mason "A hand book for travellers in Japan" J. Murray　1913（購入）

13　M.S. Kohli "Trek the Himalayas" N.H. Dastur　1971（M.S. Kohli 氏寄贈）

14　M.S. Kohli "The Himalayas; Playground of the Gods" Vikas Pub. House　1983（M.S. Kohli 氏寄贈）

15　IMF "Indian Mountaineering Foundation" IMF　1983（M.S. Kohli 氏寄贈）

16　Karl Herrligkoffer "Sieg am Kanchenjunga" 1983（Karl Herrigkoffer 氏寄贈）

17　M.S. Kohli "Nine atop Everest" Orient Paperbacks（M.S. Kohli 氏寄贈）

18　Arlene Blum "Annapurna; a woman's place" Sierra Club Books 1983（佐々保雄氏寄贈）

19　"Cilo dağlari" (Les monts djilo) Millî Eğitim　1949（麻生武治氏寄贈）

20　"Sanjay Gandhi; Adventure scheme"（佐々保雄氏寄贈）

21　Pietro Francesco Mele "Tibet" Morano Editore 1956（牧野四子吉氏寄贈）

22　"The Alpine journal 1983" The Alpine Club　1983（購入）

23　美坂哲男著「続　山のいで湯行脚」山と渓谷社　1984（版元寄贈）

24　小林泰彦著「画文集　低山徘徊」山と渓谷社　1984（版元寄贈）

2 月分受入図書

1　長野県警察本部「山あればこそ」編集委員会「ケルン "山岳遭難" 15年のまとめ」1969（松田雄一氏寄贈）

2　Joyce Dunsheath EleanorBaillie "Afgan guest" G.G. Harper 1961（松田雄一氏寄贈）

3　Ake Sparring "Nepal" R. & Sjorgren 1956（松田雄一氏寄贈）

4　Ella Maillart "The Land of the Sherpas" Hodder and Stoughton 1955（松田雄一氏寄贈）

5　W.H. Murray "The Scottish Himalayan Expedition" J.M. Dent 1951（松田雄一氏寄贈）

6　Charles Stonor "The Sherpa and the Snowman" Hollis & Carter 1955（松田雄一氏寄贈）

7　Ralph Izzard "The Abominable Snowman Adventure" Hodder and Stoughton 1955（松田雄一氏寄贈）

8　W.H. Murray "The Story of Everest 2nd ed." J.M. Dent 1953（松田雄一氏寄贈）

9 S.M. Goswami "Everest; is it conquered?" (著者出版) 1955 (松田雄一氏寄贈)
10 Earl Denman "Alone to Everest" Collins 1954 (松田雄一氏寄贈)
11 Eric Shipton "Mountains of Tartary" Hodder & Stoughton (松田雄一氏寄贈)
12 H.W. Tilman "China to Chitral" Cambridge Univ. Press 1951 (松田雄一氏寄贈)
13 Joe Tasker "Savage area" St. Martin's Press 1982 (松田雄一氏寄贈)
14 リカルド・カシン著 水野勉訳「大岩壁の五十年」白水社 1977 (版元寄贈)
15 深田久弥著「ヒマラヤの高峰1～5」白水社 1983 (版元寄贈)
16 薬師義美編「ヒマラヤ文献目録」白水社 1984 (版元寄贈)
17 高山研究所編「登山のルネサンス」山と渓谷社 1982 (版元寄贈)
18 ラインホルト・メスナー著 尾崎鑒治訳「死の地帯」山と渓谷社 1983 (版元寄贈)
19 太田愛人著「山麓の生活誌」山と渓谷社 1983 (版元寄贈)
20 落合誓子「女たちの山—シシャパンマに挑んだ女子隊9人の決算」山と渓谷社 1982 (版元寄贈)
21 加藤ハナ「エベレストに消えた息子よ」山と渓谷社 1984 (版元寄贈)
22 ラインホルト・メスナー アレッサンドロ・ゴーニャ著 尾崎鑒治訳「K2—七人の闘い—」山と渓谷社 1982 (版元寄贈)
23 佐貫亦男著「佐貫亦男のチロル日記」山と渓谷社 1983 (版元寄贈)
24 「ヨーロッパ・アルプス—現代山岳紀行—」山と渓谷社 (版元寄贈)
25 鴫満則・鴫秋子共著「ザイルの二人」山と渓谷社 1983 (版元寄贈)
26 山本和雄「槍・穂高讃歌」山と渓谷社 1983 (版元寄贈)
27 ハンス・グロッセン著 近藤等訳「ベルナー・オーバラント」山と渓谷社 1983 (版元寄贈)
28 水越武著「山の輪舞—水越武写真集—」山と渓谷社 1983 (版元寄贈)
29 京都府高等学校登山部 顧問団カラコルム登山隊編「PK 6885 登山報告書 83」1983 (塚本珪一氏寄贈)
30 原真・渡辺興臣共著「ヒマラヤ研究」山と渓谷社 1983 (版元寄贈)
31 白籏史郎著「NEPAL HIMALAYA」山と渓谷社 1983 (版元寄贈)
32 白籏史郎著「ヨーロッパ・アルプス」山と渓谷社 1983 (版元寄贈)
33 「鈴木牧之全集 上・下巻」中央公論社 1983 (購入)
34 坂戸勝己著「山のかおり」日本山書の会 1983 (水野勉氏寄贈)
35 一橋山岳部編「針葉樹 第10号」1939 (購入)
36 岩科小一郎著「富士講の歴史」名著出版 1983 (版元寄贈)
37 安藏貞夫著「私の山—単独行の君への手紙—」鶴屋書店 1983 (著者寄贈)

3月分受入図書

1 日本山岳会編「山岳 第78年」1983
2 日本山岳会編「山日記 1984年度」1983
3 松田宏也著「足よ手よ。僕はまた登る」山と渓谷社 1984 (版元寄贈)
4 信濃毎日新聞社編「信州山岳百科Ⅰ～Ⅲ」1983 (編者寄贈)
5 羽賀正太郎ほか編「日本の名山Ⅱ 大山・石鎚と中国・四国の名山」ぎょうせい 1984 (版元寄贈)
6 塚本闊治著「丹沢山塊」山と渓谷社 1944 (古谷聖司氏寄贈)
7 鉄道省山岳部編「日本山岳案内 4・5・8・9・10・11・12」博文館 1941～1943 (古谷聖司氏寄贈)
8 小島烏水著「小島烏水全集 13巻」大修館書店 1984 (版元寄贈)
9 高頭義明著「御国の咄し」積善館 大14 (岩科小一郎氏寄贈)
10 早稲田大学山岳部編「リュツクサックⅫ」1983 (編者寄贈)
11 宇江敏勝著「山びとの動物誌」福音館書店 1984 (版元寄贈)
12 日本山岳会集会委員会 インドヒマラヤ登山チーム編「Z1 (6,181 m)-Leh (LADAKH) 登山報告書」1983 (編者寄贈)
13 "Berg '84 : Alpenvereinsjahrbuch" Deutschen und Österreichischen Alpenverein 1984 (版元寄贈)
14 "The Alpine Journal 1983" The Alpine Club 1983 (版元寄贈)
15 河口慧海著 "Three Years in Tibet" The Theosophist Office 1909 (購入)
16 倫敦日本協会編 "Transactions and proceedings. Vol. 9, 9th session, Pt. 1" Kegan Paul 1910 (購入)
17 深田久弥著「山の幸」青木書店 昭16 (購入)
18 深田久弥著「山頂山麓」青木書店 昭17 (購入)
19 色部祐二郎著「科野名所集」城南書店 明42 (購入)
20 小川芳樹著「一地理学者の生涯」昭16 (購入)
21 「諸國名山往来」森屋治兵衛 文政7 (購入)
22 高島北海著「寫山要訣 完」東陽堂 明36 (購入)

(以下次号)

「信濃支部三十五年」—JAC 信濃支部35年史—

A5版 G12頁 本文621頁 上製本函入
頒価 6000円 送料 300円

(申込先) 日本山岳会信濃支部
〒390 松本市新橋 3-21

TEL (0263) 32-1029; 郵便振替 長野 0-3665;
銀行振込 八十二銀行松本駅前支店 (普) 243-869

会員通信

岩橋崇至写真展

場所　穂高岳山荘
日時　七月二十五日(水)～八月二十五日(土)

＊　＊

藤江幾太郎 ネパール油絵展

場所　札幌そごう八階画廊
日時　八月三日(金)～八月八日(火)

＊　＊

会員の皆様にお願い

丹沢ヤビツ山荘が昨年の台風で崩壊し、実費で再建することになりました。皆で資金集めのカンパをしています。一口千円（何口でも結構です）でご協力をお願いいたしたいのですが。

会員番号七一〇六　木村　真
（自宅）270－01流山市駒木529の24
☎0471-55-4522；(勤)03-551-8294

昭和五十九年七月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五－四
サンビュウハイツ四番町
発行所　社団法人　日本山岳会
発行者　佐々保雄
編集代表　岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座東京三－四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所　株式会社　技報堂